

●2008年  
2月10日(日)  
PM

# 「学校と環境教育」

●場所  
第一研修室

司会：渡辺勝徳氏（国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職）

ゲスト：小澤紀美子氏（東京学芸大学教育学部教授）

後藤文博氏（前橋市教育委員会学校教育課指導主事）

松井孝夫氏（群馬県立尾瀬高等学校教諭）

参加者：14名（男性10人、女性4人）

【要旨】：最初に渡辺氏より、ゲストの紹介と分科会の狙いが述べられた。その後、場作りのために、「ネームゲーム」、「息合わせ」、「三つの窓」を行った。

次に、後藤氏より「前橋市内の学校における環境教育の現状」と題して、前橋市における環境教育の重点事項や具体的な実施例、今後の展望などが話された。フロアからは、教育委員会の役割や研修内容等について質問が出された。また、松井氏より「尾瀬高校の実践発表-外部との連携を軸に-」と題して、環境専門科目、校外学習、外部との連携などが話された。フロアからは、予算や人材をどのように確保するのか等について質問が出された。

二つの発表を受け、小澤先生より各教科と環境教育との関わりを理解する必要性、暗黙知に潜入する環境教育の重要性などについてコメントされた。

休憩後は、参加者毎に「自然体験プログラム作り」を行い、その上でグループごとにシェアリングを行った。各グループから一名ずつプログラム案を紹介してもらい、小澤先生から講評を頂き、まとめとした。

## 1. 趣旨説明・ゲスト紹介：渡辺氏

分科会のねらい

- ・ 学校の環境教育の現状を理解する
- ・ 学校の外部指導者となったときにどんなかかわり方ができるかを探る

## 2. アイスブレイク：参加者全員

## 3. 「前橋市内の学校における環境教育の現状」：後藤氏

【発表】別紙「前橋市内の環境教育公開版」参照

【質疑応答・意見】

- ・ 教育委員会が、コーディネータを担ったのか？
  - 教育委員会は、モデル校に実施マニュアルを作成してもらい、各学校に配布した。
  - 地域との斡旋などはしていない。
- ・ コンポストの利用実態はどうなっているのか。
  - 現状はまだ実験段階である。

- ・ 尾瀬についての取り組みについて、学校が決めるのか、教育委員会が決めるのか。

➢ 環境教育のテーマは、各学校の裁量に任されている。ただし、尾瀬をテーマとした環境教育を取り上げていく必要があると考えている。

- ・ 教員の研修について

➢ 環境教育研修講座を年二回実施している。  
➢ 去年は、赤城の松枯れを題材に実施した。  
➢ 各学校一人以上、主に環境主任が参加している。

- ・ 校長先生によって学校の雰囲気は変わるか

➢ 変わる。

- ・ 体験活動の効果をどう考えているのか

➢ 効果をどう位置づけるかは難しい。しかし、環境教育は重要だと考えている。

- ・ 環境教育はどの程度行われているのか。

➢ 各学校には環境主任を配置しているが、学校間で差があると考えている。

## 4. 「尾瀬高校の実践発表-外部との連携を軸に-」：松井氏

【発表】別紙「尾瀬高校の環境教育公開版」参照

【質疑応答】

- ・ 中学校での環境のレベルはどうなっているのか
  - 学校毎、生徒毎によって差がある。
- ・ 予算はどうなっているのか
  - 助成金なども利用しているが、お金がかからないような工夫をしている。
- ・ 人材（教員24名）をどのように確保したのか。モチベーションの維持をどうしているのか。
  - 成果を出すことで人材（人数）は確保できる。すべての教員のモチベーションが高いわけではないが、直接の担当者は、生徒の成長を実感してモチベーションを高めている。
- ・ 辞めてしまう生徒はいるのか
  - 年によっては、一人二人は存在する。辞めない理由としては、数年後の自分の姿として、先輩の姿（ゴール）を見られているからだろう。

## 5. 小澤先生のコメント

- ・ 尾瀬高校は、自尊感情を育む教育ができているので、辞める子どもが少ないのだろう。地域は育ちのモデルとしての大人がいない。

- ・ 教員には、各教科と環境教育との関わりを理解する必要がある。また、講義型の授業だけでなく、体験型の授業も求められている。
- ・ NPO・NGOと連携を組みながらやる。その際には、教員は子どもたちの達成目標を設定し、連携相手に伝える必要がある。
- ・ 子どもたちの暗黙知にどのように潜入していくのかが、環境教育にとって重要である。そのためのプログラム開発が必要である。
- ・ 学校と連携するには、学校が次年度の計画を立てる1-2月に提案すると良いだろう。

~~~~~休憩~~~~~

6. 自然体験活動プログラムづくり：参加者全員  
別紙「自然体験プログラムづくり」に基づき、各自20分でプログラムを作成し、その後3グループに分かれて意見交換（20分）を行った。各グループ1名ずつ発表をしてもらった。

## 7. 小澤先生より指導講評

- ・ 科学的な視点をいれられるような工夫の必要があるだろう。体験を経験化する必要がある。経験化には、体験を言語化する必要がある。
- ・ 子どもが切り取りたいものをデジカメでとる。子どもは美しいものと同時に、不法投棄などにも気づく。その後、それを題材にして学習できる。
- ・ 思考するには、まずは書くことが大事である。ポストイットなどを活用しましょう。子どもも一緒。
- ・ 環境教育の中で、繋がりを考えてプログラムを実施しなければならない。
- ・ 子どもたちの力を信じましょう。子どもたちは、適切な刺激さえ与えれば、自分たちで気づく力を持っている。
- ・ リスクを踏まえたくうえで、子どもたちの行動を想定して準備をし、プログラムを実施しなければならぬ。
- ・ おとなはサプリメントのように自然体験をし、内なる自然の補給をするが、子どもはそうではないだろう。
- ・ のっぼさんは子どものことを小さな人とする。
- ・ 子どもたちからも学ぶことが多くある。
- ・ おとなが、こどもに大事にしているというメッセージを出すことが、子どもの自尊感情を育むことができる。

（レポート：ぐんま環境教育ネットワーク 諏訪博彦）